

# 語りのテキストにおける視点の日英対照研究

——場所・方向の表現を中心に——

菅 沼 文 子

キーワード： 語りのテキスト、視点、コ系指示詞、基準点、場所・方向

## 1. はじめに

語りのテキストは「起こったと想定される一連の『出来事』をある『語り手』が言語によって構成し、提示する」（池上 1986: 64）ものである。語りのテキストにおける出来事描写は基本的には語り手の視点からの描写と考えられるが、日本語のテキストでは登場人物の視点からの描写が織り交ざることが指摘されている。<sup>1</sup>

例えば時制の側面の分析から、日本語のテキストでは過去形による語りに非過去形が入り混じり、英語と比べた場合の頻度や多様性から、日本語では登場人物の視点をとりやすく英語では語り手の視点を保つ傾向にあると言われている（牧野 1978; 池上 1986; 山中 1998; 山岡 2001 など）。

では語りのテキストにおける「場所」の側面から見ると、日英語の視点についてどのような特徴や傾向が見られるか。ここでは、「場所」と深く関わる「方向」も含めて考えたい。(1J)は日本語の童話からの引用である。主人公の少年とその友人が、男性から話しかけられている。(以下、例文に付された下線や波線は全て筆者によるものである。また、元の文章の振り仮名は省略している。例文最後の( )は引用した作品のタイトルを表す。)

(1J) 「きみたちは参観かね。」その大学士らしい人が、めがねをきらっ

とさせて、こっちをみて話しかけました。 （「銀河鉄道の夜」）

ここでの「こっち」は、「きみたち」にあたる登場人物がいる方向を指していると考えられる。(1J)のような登場人物を基準点とする「こっち」は日本語の語りのテキストの地の部分にしばしば見られる。<sup>2</sup> このような「こっち」は英語ではどのように表現されるのか。この場所・方向を指示するコ系指示詞を手がかりに、日英語における視点の問題を考えたい。

## 2. 目的

本研究では、語りのテキストの出来事内で登場人物を基準点に直示的に場所・方向を指示するコ系指示詞を取り上げ、それを英訳版における対応表現と比較して、日英語の語り手の視点のあり方を調べる。さらに日英語における語り手の視点の違いの背景には何があるのかを考える。

## 3. コ系指示詞と ‘this/here’ の種類・用法について

日本語の指示詞はコ系、ソ系、ア系の三項対立の形を、英語の指示詞は ‘this’ と ‘that’ の二項対立の形を持つ。<sup>3</sup> 語彙に関する両者の違いを見ると、日本語は、佐久間 (1951) の分類に基づきコ系を例に挙げると、「これ」(もの)、「こちら・こっち」(方向)、<sup>4</sup>「ここ」(場所)、「こいつ」(もの・人)、「こんな」(性状)、「この」(指定)、「こう」(容子)といった表現を持ち、さらにソ系やア系も同様に体系づけられ豊富な語彙を持つが、英語は ‘this’ や ‘that’ とその複数形、及び ‘here’ や ‘there’ など指示詞の語彙が限られるという違いが見られる。

日本語のコ系指示詞については、日英語の指示詞の「直示」用法 (Bühler 1934; Russell 1940; Lyons 1977; Fillmore 1982 など) を比較対照する場合、‘this’ を対応させて説明されてきた(服部 1968: 74; Coulmas 1982: 211; 安藤 1986: 71)。

本研究では、場所・方向を指示するコ系指示詞を取り上げるが、それに

対応する英語の指示詞としては ‘this/here’ が考えられる。日英語のこれらの指示詞について、直示の中心になるのは通常話し手を基準点とした場所であり、ともに話し手に関わりの強い場所・方向を指示するという共通点があることを前提に分析する。

## 4. 方法

### 4.1. フレームワーク

本研究では、指示詞の基準点が語り手から登場人物へと移動しているか、もしも移動していないのならばその部分はどのように表現されているか、それによって語り手の視点からの描写か登場人物の視点からの描写かを判断する。

「視点」という言葉は池上(2000)に基づいて「出来事認識の原点」と定義する。「語り手の視点からの描写」という表現は、語り手に認識の原点を置き、出来事を対象化して描写している状態を指して使う。「登場人物の視点からの描写」という表現は、語り手自身が登場人物の視点をとって描写すること、つまり見られ語られる対象である登場人物に認識の原点を置いて出来事を描写している状態を指して使う。

### 4.2. データ

データとしては、語りのテキストの中でも特に日本語童話とその英訳版を選び、登場人物を基準点に直示的に場所・方向を指示するコ系指示詞を英語の対応表現とともに分析した。童話を選んだ理由は、コンテキストの展開が明確でわかりやすく指示詞の基準点を把握しやすいことが挙げられる。ここでは、コ系指示詞を効果的に用いて物語を展開している宮沢賢治の作品を選び、英訳版は John Bester によるものを選んだ。<sup>5</sup> 対象とした表現は、テキストの地の部分に見られた場所・方向を指示する「ここ」(「ここら」を含む)、「こちら」、「こっち」と、それに対応する英語の表現である。英語の表現については、‘this’ (‘this way’ や ‘this side’ などの

‘this’) と ‘these’ 及び ‘here’ と、それ以外に対応表現となっていたものが分析対象に含まれる。

## 5. 分析

今回は、日本語版の場所・方向を指示するコ系指示詞(以下、「場所・方向のコ系」と呼ぶ。)がどのように英訳版で表現されているかを見た。そしてそれらの指示詞と対応表現が用いられる際の視点に着目し、日本語原作とその英訳版で違いが見られる点を探る。

### 5.1. 場所・方向のコ系の基準点の移動について

日本語で登場人物を指示の基準点とした場所・方向のコ系は 61 例見られ、英訳版に見られた対応箇所 61 例のうち場所・方向を表す指示詞で訳されていたものは 7 例であった。英訳版で該当する指示詞がない場合の 54 例については、登場人物に関わる場所・方向が指示詞以外でどのように表現されているかを調べた。<sup>6</sup>

#### 5.1.1. 登場人物への基準点の移動が日英語版でともに見られた場合

まず、日本語指示詞が英訳版にそのまま指示詞として持ち込まれていた例を取りあげる。7 例のうち 5 例は、例えば ‘this and opposite bank’ のように内容的に対になるような表現 (‘opposite’) と組み合わせで出てきていた。また残り 2 例は次のようなものであった。

(2J) をその同じ箇所の英訳版からの引用である (2E) と比べたい。

(2J) だれがいったいこちらでさぎなんぞたべるだろうとジョバンニは  
思いながらきました。「さぎはおいしいんですか。」

(「銀河鉄道の夜」)

(2E) “Do herons taste nice?” asked Giovanni, wondering who would  
eat herons in these parts. (“Night Train to the Stars”)

(2E) の ‘these’ は登場人物であるジョバンニを基準点として「この辺り」という意味で使われている。‘Wonderding’ というジョバンニの思考

を示す表現とともに使われており、ゆえに登場人物を基準点にする ‘these’ が生じやすかったと考えられる。

(3J) と (3E) は「注文の多い料理店」で、登場人物の 2 人が料理店の中を料理店から出される指示に従って歩いている場面からの引用である。

(3J) それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、  
「クリームをよく塗りましたか、耳にもよくぬりましたか。」  
と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。  
(「注文の多い料理店」)

(3E) Then they opened the door in a great hurry — only to find a notice on the other side which said:  
DID YOU PUT ON PLENTY OF CREAM? ON YOUR EARS TOO?  
There was another, smaller jar of cream here.  
(“The Restaurant of Many Orders”)

扉を開けたところにクリームの壺が置かれている状況であり、登場人物に視点が入りやすいので英訳版でも ‘here’ で訳されたのではないかと考えられる。

以上のように登場人物の視点ととれるものも 7 例ほどあったが、残りの 54 例は英訳版では指示詞による表現にはなっていないものであった。

#### 5. 1. 2. 登場人物への基準点の移動が日本語版でのみ見られた場合

では、場所・方向のコ系が英訳版で指示詞として訳されていない場合について、そのコ系が何を指しているかを基に 3 つに分類し、英訳版での表現を見たい。

##### 5. 1. 2. 1. 登場人物のいる場所を基準点とした場所を指す場合

(4J) は、「鹿踊りのはじまり」からの引用である。この話は、主人公の嘉十がすすきの隙間から覗いて見た鹿の行動の描写が話の主要部分になっている。この例文までの数ページにわたり、嘉十が見た鹿の様子が描かれている。

- (4J) 右から二ばん目の鹿が、俄かにとびあがって、それからからだをなみのようにうねらせながら、みんなの間を縫ってはせまわり、たびたび太陽の方にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻るやびたりととまっていたいました。

(歌の部分省略)

はあと嘉十もこっちでその立派な太陽とはんのきを拝みました。  
(「鹿踊りのはじまり」)

- (4E) Then the second deer from the right suddenly leapt up and, twisting his body to and fro, ran in and out between the others, bowing his head again and again to the sun till at last he returned to his own place, stopped quite still, and began to sing. . .

Kaju caught his breath and himself bowed low to the sun in its glory, and to the alder tree. (“The First Deer Dance”)

(4J) (4E) とともに鹿の歌の部分までは、嘉十が覗いているすすきの向こうで繰り広げられている出来事である。(4J) では鹿のいる場所と対比的に、すすきを境に嘉十のいる場所が「こっち」で示されている。ここでの「こっち」は出来事内の嘉十に基準点を置いた指示詞の使用であり、語り手は嘉十の視点から出来事を捉えている。一方(4E) では、特に ‘here’ などの指示詞では訳されていない。嘉十の視点の関与は感じにくく、語り手の視点から鹿の行動と嘉十の行動を対象化して描いているといえる。

(5J) も「鹿踊りのはじまり」で主人公の嘉十がすすきの隙間から鹿の様子を覗いている場面である。嘉十が覗いている先では、六疋の鹿がぐるぐる環になって廻っている。

- (5J) 嘉十はすすきの隙間から、息をこらしてのぞきました。(略)  
もちろん、その環のまんなかには、さっきの嘉十の柘の団子がひとかけ置いてあったのですが、鹿どものしきりに気にかけているのは決して団子ではなくて、そのとなりの草の上にくの字になって落ちている、嘉十の白い手拭らしいのでした。(略)  
それから鹿どもはまわるのをやめてみんな手拭のこちらの方に来て立ちました。  
(「鹿踊りのはじまり」)

(5E) Hardly daring to breathe, Kaju peered at them from between the pampas stems. . . .

In the middle of the ring, of course, was the chestnut dumpling that Kaju had left there a while ago. The thing that was bothering the deer so much, though, was not the dumpling, it seemed, but Kaju's white cotton towel, which lay in a curve where it had fallen on the ground. . . .

Finally, they stopped circling altogether and came and stood in a group between Kaju and the towel. ('The First Deer Dance')

(5J) (5E) とともに嘉十が覗いている先で鹿が廻っているという位置関係である。日本語版 (5J) の「こちら」は嘉十を基準点にした指示詞の使用であり、嘉十の視点から見て鹿は手拭よりも手前の位置、つまり手拭と嘉十の間に集まっている。一方英訳版 (5E) では同じ箇所が指示詞では訳されていない。その代わりに鹿が集まっている位置は 'between Kaju and the towel' と表現され、一直線に並んだ嘉十と鹿と手拭を語り手が遠くから眺めるように捉えて説明している。

#### 5. 1. 2. 2. 登場人物のいる場所を基準点とした方向を指す場合

次に、場所・方向のコ系が登場人物を基準点にその人物のいる方向を指示している例を見たい。

次の例は「銀河鉄道の夜」からである。主人公のジョバンニは友人のカムパネルラとともに軽便鉄道の座席に並んで座っている。二人はそばに座った赤いひげの男性から話しかけられる。

(6J) 赤ひげの人が、少しおずおずしながら、ふたりにききました。「あなたがたは、どちらへいらっしゃるんですか。」(略)

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、けんかのようにたずねましたので、ジョバンニは思わずわらいました。すると、むこうの席にいた、とがったぼうしをかぶり、大きなかぎを腰に下げた人も、ちらっとこっちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くしてわらいだしてしまいました

た。 (「銀河鉄道の夜」)

(6E) “Where would you be going, I wonder?” the man with the red beard asked them, rather timidly. . . .

“And where are *you* going [italics in original]?” inquired Campanella abruptly, sounding so aggressive that Giovanni couldn’t help smiling. Then a man in the seat across the aisle, wearing a pointed hat and with a big key dangling from his sash, glanced in their direction and smiled too, so that Campanella blushed and finally began to smile in his turn. (‘Night Train to the Stars’)

(6J) はカムパネルラの大きな声に離れた席の人が笑う場面である。「こっち」はジョバンニとカムパネルラ 2 人のいる方向を指しており、2 人を基準点にして 2 人の視点から使われている表現ということがわかる。一方 (6E) では、‘a man glanced in their direction’ のように人称代名詞 ‘their’ と方向を意味する ‘direction’ を用いて、当事者ではなく第三者の視点から子供たち 2 人と男性の関係を客観的な方向の表現で表している。

(7J) と (7E) では、日本語版における登場人物の視点を通しての描写が英訳版では対象とする人間の一人の行動として表されている。

(7J) 運動場を出る時その子はこっちをふりむいて、じっと学校やみんなの方をにらむようにすると、またすたすた白服のおとなについて歩いていきました。 (「風の又三郎」)

(7E) Just as he was leaving the playground, the boy turned around and stared almost fiercely in the direction of the school and the rest of the class before briskly setting off again after the man in the white suit. (‘Matasaburo the Wind Imp’)

「その子」が子供たちのいる方向を振り向く動作は、(7J) では語り手が登場人物である「みんな」の視点をとって描写しており、一方 (7E) では ‘around’ で「反対方向に向きを変える」と表して語り手が「その子」自身の行動として描写している。さらに「その子」を見ている子供たちについても、(7E) では ‘the rest of the class’ と表現されており、「その子」と



「残りの子供たち」それぞれが語り手の視点から対象化して捉えられている。

### 5. 1. 2. 3. 登場人物を指す場合

日本語版では場所・方向のコ系が登場人物を基準点とした場所や方向を指しているだけでなく、登場人物そのものを指している場合も見られた。(8J)は「銀河鉄道の夜」で主人公の少年ジョバンニが軽便鉄道に乗った直後に前の席に座っている子どもが誰だか気になり、窓から顔を出して確かめようとする場面である。

(8J) そしてその子どもの肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしてもだれだかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこっちもまどから顔を出そうとしたとき、にわかにはその子どもが頭をひっこめて、こっちを見ました。(「銀河鉄道の夜」)

(8E) Something about the set of the boy's shoulders was so familiar that Giovanni felt a strong urge to find out who it was. He was just about to stick his own head out of the window to see, when the boy drew his in and looked at Giovanni.  
(‘Night Train to the Stars’)

(8J)の「こっち」はジョバンニを指している。一方同じ部分が(8E)では人称代名詞‘He’や‘Giovanni’と訳されている。

日本語では「こちら / こっち」で話し手を直示的に表現することができる。<sup>7</sup> (9J)を見たい。これは今回のデータの対象外ではあるが、「注文の多い料理店」の会話部分からの引用である。「注文」の多い料理店の「注文」の意味に登場人物である猟師たちが気づく場面である。

(9J) 「沢山の注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。」  
(「注文の多い料理店」)

(9E) “‘Lots of orders’ means *they’re* giving us orders [italics in original].”  
(‘The Restaurant of Many Orders’)

(9J)の「こっち」は猟師が自分たちを指して言っている。英語では指示詞が直示的に話し手を指すことはできず、(9E)のように人称代名詞‘us’になっている。

ここでも、日本語版は語り手が登場人物を基準点にした「こっち」を使って当事者の視点から表現しているが、同じ部分の描写が英訳版では‘He’や‘Giovanni’を使って語り手が傍観者として描写する書き方になっている。

## 5.2. 基準点が登場人物に移る場合のテキスト上の特徴

日本語版で登場人物に基準点に移る場合に見られるテキスト上の特徴を、内容面と文法面から分析したい。

### 5.2.1. 指示詞の基準点の移動と物語の内容との関係

#### 5.2.1.1. 基準点の移動先となっている登場人物

まず、物語の筋となる出来事を体験する登場人物に基準点に移る場合が多く見られた。登場人物を基準点とした場所・方向のコ系が多く見られた「銀河鉄道の夜」を例に検討したい。この物語は主人公のジョバンニが「銀河ステーション」から「夜の軽便鉄道」に乗って天空の旅をする部分が主要部分となっており、その前後にジョバンニの家庭や学校での現実の生活が描かれている。全73ページのうち天空の旅の部分は62ページであり、その大部分でジョバンニは汽車の座席に座っており、彼の周りの汽車の内外で起こる出来事が描かれている。この物語では登場人物は複数出てくるが、登場人物を基準点とするコ系の22例はすべて主人公ジョバンニ(一部ジョバンニの隣にいる友人のカムパネルラも含む)を基準点とした使用であった。(10J)はその一例である。

(10J) どんどんどんどん汽車はおりて行きました。(略) ジョバンニはだんだんころもちがあかるなくなってきました。汽車が小さな小屋の前を通過して、その前にしょんぼりひとりの子どもが立ってこっちを見ているときなどは、思わず、ほう、とさげびまし

た。 (「銀河鉄道の夜」)

(10E) Down and down, down and down, went the train. . . .

Little by little, Giovanni's spirits recovered. When the train, for example, passed a small hut, with a child standing dejectedly in front of it looking in his direction, he found himself giving a whoop of delight. ('Night Train to the Stars')

(10J)で「小さい小屋の前にしょんぼりひとりの子供が立っている」というのは、汽車に乗っているジョバンニの目に映った状況である。そのジョバンニに指示詞の基準点が置かれて「こっち」が使われている。一方同じ箇所が(10E)では、'his' という人称代名詞を用いて 'his direction' で表現され、語り手により「ひとりの子供」とジョバンニの位置関係が客観的に表現されている。また「ほう」と叫んだ行為者についても、(10J)では明示されていないが、(10E)では 'himself' と明示されており語り手がジョバンニを客観視しているという捉え方が強く現れている。

「銀河鉄道の夜」では、登場人物を基準点とする場所・方向のコ系 22 例のうち 21 例が天空の旅の部分で見られ、物語の筋となる出来事を体験している登場人物に基準点に移りやすいという結果が得られた。

#### 5. 2. 1. 2. 基準点の移動が見られる場面

今回のデータでは特に、登場人物に状況変化が起きる場面でのその登場人物を基準点にした場所・方向のコ系の使用例が多く見られた。

(11J)は「注文の多い料理店」からの引用である。この物語では、料理店に入った登場人物が、建物の中を進みながら店からの注文に従っているうちに自分たちが料理されていく。(11J)は、進んでいる途中で、料理され食べられそうになっていることに気づいて逃げようとする場面である。

(11J) 「逃げ……。」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。奥の方にはまだ一枚扉があって、大きなかぎ穴が二つつき、銀色のホークとナイフの形が切りだしてあって、  
「いや、わざわざご苦労です。(略) さあさあおなかにおはいり

ください。」

と書いてありました。おまげにかぎ穴からはきょろきょろ二つの青い眼玉がこっちをのぞいています。(「注文の多い料理店」)

- (11E) “Let’s get out!” Still shaking all over, one of the young gentlemen pushed at the door behind him. But, strange to say, it refused to budge.

At the other end was another door with two big keyholes and a silver knife and fork carved on it. It said:

SO NICE OF YOU TO COME. . . . NOW JUST POP INSIDE, PLEASE.

What was worse, two blue eyeballs were ogling them through the keyhole. (‘The Restaurant of Many Orders’)

(11J) では、まさに食べられそうになるという急変する出来事の渦中で登場人物のいる場所を基準点とした「こっち」が使われている。登場人物の視点をとっていることは、「うしろの戸」や「奥の方」という表現や、「のぞいています」という非過去形の表現からも示されている。一方(11E)では‘them’という人称代名詞を使って、出来事の渦中にいる登場人物を傍観する書き方になっている。また(11E)では「うしろの戸」が‘the door behind him’という位置関係を客観的に捉えて明確にする書き方になっており、また「奥の方」も‘At the other end’のように建物を対象化した語り手の視点で描かれている。

### 5.2.2. 指示詞の基準点の移動と関連する文法上の特徴

では次に、基準点の移動に関連する文法や表現の傾向としてはどのようなものが見られるか調べたい。

基準点が移動している時には、しばしば①行為者の非明示②内的情態を表す表現<sup>8</sup>における知覚者の非明示③場所の基準点の非明示④非過去形の使用が見られた。これまでの例でも見られているものであるが、改めて以下の例を見たい。

- (12J) は①行為者の非明示と④非過去形の使用に関するものである。

(12J) 室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。

(「注文の多い料理店」)

(12E) The room vanished in a puff of smoke, and the two young gentlemen found themselves standing in the grass, shivering and shaking in the cold. Their coats and boots, purses and tiepins were all there with them, hanging from the branches or lying among the roots of the trees.

(‘The Restaurant of Many Orders’)

(12J) において、「こっち」とともに「見る」という動詞が行為者非明示で使われており、また「います」という非過去形の使用が見られる。行為者を非明示で使うことにより登場人物の視点が入りやすい状況になっている。また非過去形を使うことにより、語り手はその状況を体験している登場人物の視点をとって実況中継をしている。

一方(12E)では、日本語版の「見る」にあたる部分はなく、登場人物を取り巻く状況が‘Their coats and boots, purses and tiepins were all there with them,’と傍観して表現され、登場人物は‘them’という人称代名詞が示すように語り手の視点から対象化して描写されている。また、過去形の一貫した使用も状況の客観化を表している。

次に、② 内的情態を表す表現における知覚者の非明示と ③ 場所の基準点の非明示を示す(8J′)を見たい。(8J′)は、先の例(8J)をその直前の文章も含めて引用したものである。

(8J′) ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電灯のなんだ車室に、窓から外を見ながらすわっていたのです。  
(略)

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子どもが、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてその子どもの肩のあたりが、どうも見たことのあるよう

な気がして、そう思うと、もうどうしてもだれだかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこっちもまどから顔を出そうとしたとき、にわかにその子どもが頭をひっこめて、こっちを見ました。  
(「銀河鉄道の夜」)

(8E') Yes, he was sitting in the carriage, with its rows of small yellow lights, of a little narrow-gauge night train, looking out of the window. . . .

In the seat directly in front of him was a tall boy in a dark, wet-looking jacket, with his head thrust out of the window watching the outside. Something about the set of the boy's shoulders was so familiar that Giovanni felt a strong urge to find out who it was. He was just about to stick his own head out of the window to see, when the boy drew his in and looked at Giovanni.

(‘Night Train to the Stars’)

(8J') の「すぐ前」という表現は、「誰の前か」という誰、つまり場所の基準点が非明示になっている。また「気がつく」「気がする」「思う」「わかりたい」「たまらない」などの表現は、当事者のみが直接感知できる「内的情態」であり、これらの知覚者を非明示にすることで、状況認識の原点になっているジョバンニの視点で表現しているように読み取れる。一方(8E') では ‘in front of him’ で場所の基準点がジョバンニであることを語り手が示している。また ‘Giovanni felt a strong urge to find out’ のように知覚者を明示することにより、語り手がジョバンニを客観視して説明していることが示されている。

## 6. テキストにおける視点の違いの背景にあるもの

これまで、場所・方向を表すコ系の基準点が出来事内の登場人物に移動するか、またしない場合はどのような表現で描写されているか見てきた。その結果日本語版では、特に物語の筋となるような状況変化を体験する登場人物に指示詞の基準点が移動しやすく、登場人物の視点をとりにやすい傾向が見られた。それに比べて英訳版では、同じ箇所の登場人物への基準点

の移動は少なく、登場人物に関わる場所・方向を表す際には登場人物と他の人・物との位置・方向関係が、語り手の視点から客観的に捉えられて描写されていた。

さらに、日本語版における登場人物の視点のとりやすさは、「行為者の非明示」、「内的情態を表す表現における知覚者の非明示」、「場所の基準点の非明示」「非過去形の使用」などにも示されており、一方英訳版では、これらの文法面での特徴は見受けられず、「行為者の明示」、「知覚者の明示」、「場所の基準点の明示」、「過去形の使用」など一貫して語り手の視点がりやすいことが示された。

池上(2003, 2004)は、語り手が登場人物を原点として出来事を把握する認知過程を「自己投入」と呼び、英語と比較した際の日本語における「自己投入」の顕著な傾向を指摘している。<sup>9</sup> 今回の結果は池上の指摘とも一致するものである。

このような日英語における視点の違いは、テキストを通して読み手に伝えるものの違いをもたらす。日本語版では、語り手が登場人物の視点を通して状況を実況中継すると、読み手もその渦中にいて同じ体験をしているように感じる。つまり語り手が登場人物と視点を同一化させることにより、起こった出来事を伝えるだけでなく、読み手も同じ体験をしているような臨場感をも伝えている。一方英訳版では語り手は客観的な語り手の視点を貫き傍観的に出来事を捉えているので、テキストを通して出来事を伝えることが中心になっていると思われる。

では、テキストにおける視点の違いの背景には何があるのか。井出(2006: 221-222)は日本語と英語では発話の際の話し手のスタンスが異なることを指摘している。描写する出来事が舞台上で起きていると想定すると、基本的に日本語では、話し手は出来事が起きている舞台の上で、その状況の中で出来事を捉えるようなスタンスで発話している。一方英語では、話し手はその舞台を遠くから眺め全体像を把握するようなスタンスをとって発話しているという。また日本語と比べて英語では、発話の際に行為者

である発話者が思っていることを言語で明確に伝えることが大切にされる。このようなスタンスの違いは、「形態素・語彙・文法の違いから語用論・談話レベルまでの日本語と英語の違いに関係している」(同: 221)。

そのように考えると、「語りのテキスト」において同じ出来事について伝える場合でも、語り手がどのように提示するかは両言語によって大きく異なってくると考えられる。発話のスタンスとして描写する出来事の中に視点を置きやすい日本語では、語り手はごく自然に舞台の登場人物と視点を同一化しやすくなり、それが場所・方向のコ系指示詞をはじめ様々な形で表現されているのだと考えられる。そして語り手が舞台の上で実況中継するように語ると、読み手もその状況に身を置き、登場人物とより強く共感するようになると考えられる。一方発話のスタンスとして出来事から離れたところに視点を置く英語では、登場人物の場所・方向を捉える場合も含めて、語り手は舞台から離れたところで読み手に客観的に出来事を説明するかのごとく語り、それゆえに日本語と比べて出来事の伝達が中心になってくると考えられる。

## 7. おわりに

今回は語りのテキストをデータに分析したが、分析によって示された日英語の視点の異なりは様々なレベルで見られるものである。さらにデータを増やして両言語の視点について分析していくことにより、日英語に見られる諸現象の解明はより一層進むと思われる。

### 注

1 Uehara (1998: 287) は、語り手が登場人物に視点を移して出来事を捉えて描写することを 'perspective transfer' と呼んでいる。

2 語り手が登場人物の視点からコ系指示詞を用いる用法を Yoshimoto (1986: 68-70) は 'empathy' と、金水・田窪 (1992: 140) は「視点遊離のコ」の用法と呼んでいる。

3 日英両言語の指示詞の用法、及び研究アプローチについては菅沼 (2000) を参照。



4 「こちら・こっち」について、佐久間(1951)の分類では「方角」と呼ばれているが、本研究では、現在同じ意味でより一般的に使われていると思われる「方向」という表現で言い換える。

5 データ収集対象とした作品は以下13編の日本語童話とその英訳版である—「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」「土神ときつね」「オツベルと象」「毒もみの好きな署長さん」「鹿踊りのはじまり」「祭の晩」「セロ弾きのゴーシュ」とその英訳版(以上、和英対訳の童話集 *The Tales of Miyazawa Kenji* より)。「四又の百合」(『宮澤賢治全集』第9巻より)「水仙月の四日」「風の又三郎」(以上、2作品は『風の又三郎—宮澤賢治童話集 I—』より)とその英訳版(英語童話集 *Matasaburo the Wind Imp* より)。「北守将軍と三人の医者」「銀河鉄道の夜」(以上、2作品は『銀河鉄道の夜—宮澤賢治童話集 II—』より)とその英訳版(英語童話集 *Night Train to the Stars and Other Stories* より)。

6 会話、地の部分に見られた独白、登場人物からのメッセージ(「注文の多い料理店」における登場人物からの「注文」)は分析データの対象外とした。また、日本語版に見られた「あっちこっち」の「こっち」や英訳版に見られた 'here and there' の 'here' など、登場人物の視点の介入が感じられず単なる慣用句として用いられていると判断したものは分析対象外とした。

7 李(2002)によると、日本語では古代から人称代名詞としての指示詞の用法が見られる。

8 「内的情態を表す表現」は工藤(1995: 70)の「内的情態動詞」を基に、内的な思考、感情、感覚を捉える表現を指す。

9 池上(2003: 26)は「主観的な事態把握」という概念を導入し、それを「事態が発話の主体によって自己中心的な視点から体験として把握されること」と定義している。さらに事態を舞台上で演じられているものと捉え、「舞台上にいる他者に舞台の外にいる『発話の主体』が自ら同化させ、その他者が原点となって『主観的把握』を行う」場合を「自己投入」(同: 41)と呼んでいる。

#### 参考文献

- 安藤貞雄(1986)「日英語のダイクシス(上)」『英語教育』34-12: 70-75.
- Bühler, Karl (1934) *Sprachtheorie*. Jena: Fischer.
- Coulmas, Florian (1982) Some remarks on Japanese deictics. In: Jürgen Weissenborn and Wolfgang Klein (eds.) *Here and there: Cross-linguistic studies on deixis and demonstration*, 209-221. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Fillmore, Charles J. (1982) Towards a descriptive framework for spatial deixis. In: Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.) *Speech, place, and action: Studies in deixis and related topics*, 31-59. New York: John Wiley and Sons.
- 服部四郎(1968)『英語基礎語彙の研究』東京: 三省堂.
- 井出祥子(2006)『わきまへの語用論』東京: 大修館書店.
- 池上嘉彦(1986)「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」『記号論

研究』6: 61-74.

池上嘉彦 (2000) 『『日本語論』への招待』東京：講談社.

池上嘉彦 (2003) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」『認知言語学論考』3: 1-49.

池上嘉彦 (2004) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (2)」『認知言語学論考』4: 1-60.

金水 敏・田窪行則 (1992) 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」金水敏・田窪行則(編)『指示詞』123-149. 東京：ひつじ書房.

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京：ひつじ書房.

Lyons, John (1977) *Semantics* Vol. 2. Cambridge: Cambridge University Press.

牧野成一 (1978) 『ことばと空間』東京：東海大学出版会.

李 長波 (2002) 『日本語指示体系の歴史』京都：京都大学学術出版会.

Russell, Bertrand (1940) *An inquiry into meaning and truth*. London: George Allen and Unwin.

佐久間 鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』(改訂版) 東京：恆星社厚生閣.

菅沼文子 (2000) 「最近の指示語研究と日本語からの貢献—指示語使用における普遍性と個別性を求めて—」『日本女子大学文学部紀要』49: 1-17.

Uehara, Satoshi (1998) Pronoun drop and perspective in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 7, 275-289.

山中桂一 (1998) 『日本語のかたち—対照言語学からのアプローチ』東京：東京大学出版会.

山岡 實 (2001) 『「語り」の記号論—日英比較物語文分析』東京：松柏社.

Yoshimoto, Kei (1986) On demonstratives *ko/so/a* in Japanese. *Gengo Kenkyu* 90: 48-72.

#### 使用テキスト一覧

宮沢賢治 (1963a) 『風の又三郎—宮沢賢治童話集 I—』東京：岩波書店.

宮沢賢治 (1963b) 『銀河鉄道の夜—宮沢賢治童話集 II—』東京：岩波書店.

宮澤賢治 (1968) 『宮澤賢治全集』第9巻. 東京：筑摩書房.

Miyazawa, Kenji (1987) *Night train to the stars and other stories*. Trans. John Bester. Tokyo: Kodansha International.

Miyazawa, Kenji (1992) *Matasaburo the wind imp*. Trans. John Bester. Tokyo: Kodansha International.

Miyazawa, Kenji (1996) *The tales of Miyazawa Kenji*. Trans. John Bester. Tokyo: Kodansha International.